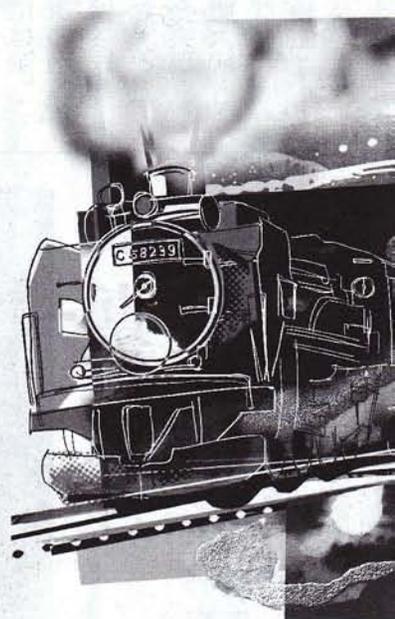


聞こえたであろうから、生まれつき汽車が好きだったといっても、理解してもらえないであらう。

そんな大好きな汽車だったが、小学校に入る前に名古屋市千種区の団地に引っ越ししてしまい、鉄道と毎日接するとはなくなってしまう。そのうち、市内から、そして全

人々を元気に



絵・安藤邦子

るイベントの一端として、再びデゴイチが釜石線を走った。なぜか汽車の汽笛を聞くと線路際に集まってくる人々が大勢いる。他の車両が走っても見向き

試運転を経て、とうとう復元完了。報道公開の試運転列車に乘車すると、被災地の仮設住宅に住んでいる人々が子供も大人も大勢駆け寄って手を振っていた。それに応えるように大きな汽笛を鳴らして、汽車は遅いながらも懸命に勾配に挑むのである。

蒸気機関車が、スマートで高性能であれば、かくも人を夢中にさせないのではないだろうか。武骨で、見かけほど力はないけれど、とにかく一生懸命汗をかきように雄たけびを上げて進む機関車。あの子に心ひかれ、元気をもらうのではないだろうか。SL列車が、被災地を元気づけ、多くの観光客や鉄道ファンを呼び寄せるといふ試みは見事に成功した。そして、取材している私も幼少の頃を思い出しながら、元気をもらった。

大波小波

群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」が二十五日、世界文化遺産に登録された。四月にイコモス(国際記念物遺跡会議)の勧告が出てから地元富岡市では観光客が増加しているという。日本の産業振興をめぐり製糸場の建設を指揮した渋沢栄一や和洋折衷

の赤レンガの建物の建設を担った葦塚直次郎、渋沢のいとこで最初の工女として自分の娘を働かせた初代場長の尾高惇忠など、一地方

製糸工場を支えた女たち

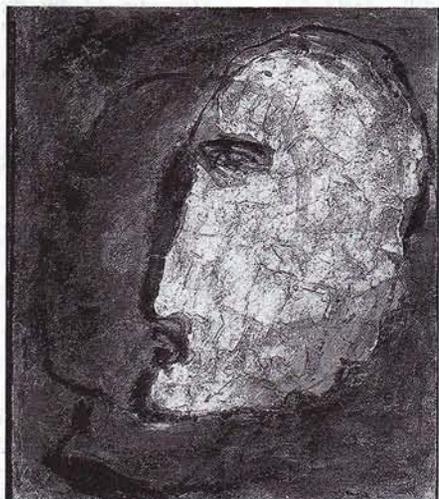
都市を世界最高水準の製糸技術に結びつけた人々の功績は大きい。「女工哀史」の著者細井和喜蔵が「人類の母」と呼

ぶほど、初期の工女たちは大切にされた。高賃金で休憩も充実、深夜業も制限されていた。この雇用関係が「虐待」に変わって行くの

は明治の中期以降。日本の女子労働者の実態を詳細に記した『職事情』によると、明治三十六年にはすでに工女たちの非人間的な労働環境が記録されている。

群馬県生まれの新井高子の詩集『ベットと織機』の表題作にも、工場で子に乳を飲ませながら糸を繰る女たちの苦痛に満ちた生活が描かれている。世界遺産の裏に隠れた虐待の機械音。新井はこの音を「ジャンガンジャンガン」と表現しているが、この音が日本の近代を支えていたことを忘れてはならない。(蘭)

つかの間の勝利に酔いしれる高揚感よりも、深い挫折を抱えた敗北感の方が芸術を育み、世の名作、傑作を生み出すのかもしれない。現在、日本初の回顧展が開催されているジャン・フォートリエ(一八九八―一九六四年)のキャリアを通して観ると、そんな思いを強くする。フォートリエは、二度の世界大戦を引き起こし上空前の大殺戮を目の当たりにした欧米諸国、いや、人類の挫折感と敗北感が生み、それによって評価された画家だろう。



《人質(人質の頭部 No. 9)》
1944年 グワッシュほか、石こう、紙(カンパスで裏打ち) 73×60cm
大原美術館蔵 ©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014 D0520

け取られがちだが、い。何げない絵の具の塊と淡い表情が人々に促したのは、原点に立ち返っておおのの現実を見直すことではなかったか。結果としての勝者も敗者もなく、人類の文化的敗北を抱きつつ、それを乗り越えるたたき台としての芸術。第二次大戦後

同時に人々が同じように育んできた。それに対して、第二次大戦以降の厚塗りの画面には、一種の時代的必然がある。画家とともに、作品を受け入れる人々によって共有された時代の精神が、そこには息づく。だからだろつ、「人質」シリーズ以降、日常の品々や情景をモチーフに、厚塗りの画面に甘さが垣間見られるようになるなかでも、悲惨な経験を内側に秘め、謙虚に日常の平穩を慈しむような切実さはある。

からイタリアのヴェニツェ入り、南へと巡業。シチア島、英国領マルタ島にたつた後、ジェノヴァへつた。さらにフランス、イス、ドイツなどで興行ながら、トルコまで行きチェコのプラハを経てウーンまで引き返した。花子の公演は、いずれあわただしいスケジューで動いていたわけだが、そらくシイラとの一年契約は、大正三(一九一四)七月初めには打ち切りになったはずである。花子は「聞き書き」で



花子が欧州から持ち来たまき(ぎん)「ロタン」

花子が欧州から持ち来たまき(ぎん)「ロタン」